

と押し、

「とあ出来た。では、おいとまじや。」

と、去っていった。それは見れば見るほどみごとな絵で、お寺では掛物にして大事にしまっておいた。

それから何年かたって、西袋に火事があった。火は東の方からお寺に近づいてくる。いまにも本堂に燃え移ろうというとき、まっ白いころもを着た人が、本堂の横にすうっと立って火の手にむかって両手をあげた。すると火の勢いが急に静まり、みてる間に消えてしまったと。ええさん、

「さて、あの方は……？ あつ、あの絵の天神さまや。」

と思ひあたった。

それからお寺では火ぶせの天神

さまとよんで、いっそう大切に

してきたといういふだ。



③9 臼すり岩と大ダヌキ

昔、西袋から小坂（河和田町）へ行く道は、山のすそに沿って細い道があるだけでした。その途中に、片方は山、片方は川の淵、近くには火葬場があつて、昼でもひっそりとしてうす暗い所がありました。

そこに人の背丈以上の、二つ重なった大きな丸い岩がありました。それがまるで臼をする石に似ていたので、臼すり岩と呼ばれていました。この岩のあたりに、タヌキが棲みついでいて、夜、ここを通る者があると、この石が臼をするように、グルグル回るように見せかけるといふうわさが広まっていました。それで、夜おそくにここを通る人は、ほとんどありませんでした。

ある日の事、西袋のお百姓さんが、小坂の祭りに出かけていきました。こちそうをよばれているうちに、すっかり帰りが遅くなり、ほろ酔い気分での岩の下を通りかかりました。

「うまいべいっつおやっとな。家で待っているおっかあやこどもらにも、早う食べさせてやりてえ。」

と、みやげにもらった折り箱を大事そうに抱えて、臼すり岩の下を通りかかりました。すると、ゴロンゴロンゴロン、ゴロンゴロンゴロンと、臼をまわすような大きな音がして来ました。その音が川のふちに響いてあんまりものすごいので、いっぺんはびっくりして逃げ出しました。が、「までよ、岩がひとりでに回るはずがねえな。こりゃきつとつわさのタヌキの仕業やな、タヌキのやつ、うらをからかいやがって。」



「夜な夜な石をグルグル回しているのはあいつやな。これはひとつ、とっ捕まえてこらしめてやろう。ほんでもこらしめるとたたりがおとろしいな、さてどうしたもんじゃろなあ。あ、ほうや。明正寺の功存さまに相談してみよう。なんせ、ご本山でも有名なおかたやで。」

と、あれこれ考えてるうちに、すっかり酔いが醒めてしまったお百姓さんは、急に恐くなり夢中で走って家に帰りました。

次の日、さっそく功存さまをたずねて、臼すり岩の話をしました。

話を聞いた功存さまは岩に南無阿弥陀仏と書いて、お経をあげてくださいました。お地藏さまもたちました。仏様の力にはかなわないのか、その後タヌキはいなくなり、岩も回らなくなったそうです。

40 継体天皇の冠

なんでも千五百年もむかしのことやと。福井県は、「越の国」っていわれた。

そしてここを治めてた豪族で『オオトノオウジ』という人があったんや。そりゃかしこい人で新しい文化や技術をひろめて、越の国を豊かにしようと努力されていた。九頭竜川、足羽川、日野